

JCOMM賞 受賞概要

京都市右京区南太秦学区における住民参加型バス利用促進 MM の継続的实施

平成 20 年 1 月の京都市営地下鉄東西線太秦天神川延伸を期に、右京区南太秦学区の悲願であった市バス運行（70 号系統）が始まった。新開設バスルートであることから、まずは一人でも多くの方の利用が得られること、そして運行継続のために利用者を着実に増加させることが必要である。そこで、地域住民が主体となり、右京区役所・京都市交通局と連携し、バスの利用促進を目指した MM の取組が平成 19 年度から始まった。

当初は環境・公共交通機関の利用促進をテーマに WS を重ね、CO2 排出量などを考慮した「おでかけマップ」を作成・配布した。

その後、地域住民の 70 号系統を活用したおでかけ支援をテーマに、利用実態アンケート調査、体験乗車券配布と乗降客数調査、WS 形式での意見交換を重ね、使いやすいポケット時刻表を作成・配布した。地域住民が取組を通じて MM への理解を深めたことと右京区役所の柔軟な対応により、同一地域で 4 年間取組を継続できた。

地域住民を中心に市バス 70 号系統の認知度も向上し、一日平均利用者が 480 人（平成 19 年度）から 875 人（平成 22 年度）に増え、平成 23 年度には平日で 1,000 人を超えるまでに増加（速報値）。このような利用者数の顕著な増加傾向に京都市交通局も即応し、平成 24 年 3 月のダイヤ改正で増発するなどのサービス向上が実現した。このような取組は、地域住民主体の MM、プロジェクトを協働で進める体制づくりなど、市街地周辺部のバス路線の活性化のモデルケースとして注目されている。

「地域の足は地域が守る」という意識の共有、4 年間の取組の継続とともに、主体的な取組を通じて MM への理解を深めた地域住民が、地域内で意識共有の輪を広げていったことが身近な利用者の増加につながった。

また、市バス 70 号系統は、右京区を南北に貫くとともに経路の両端が鉄道駅に接続する設定であることも大きな要因だが、行政機関・交通事業者と地域が協働していく体制の構築、一人ひとりの交通行動を変えることをめざした地道な地域住民主体の取組の継続が大きな要因として挙げられる。

(日本モビリティ・マネジメント会議のホームページより)